

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02070

研究課題名(和文)アラウィー派主要教義と宗派対立に関する思想史的研究

研究課題名(英文) A Study of Principal Doctrines of the Alawites and Sectarian Frictions from a Viewpoint of History of Ideas

研究代表者

菊地 達也 (Kikuchi, Tatsuya)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授

研究者番号：40383385

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、シリアにおいて大きな政治的影響力を持つイスラム少数派、アラウィー派(ヌサイル派)の思想形成の過程を解明し、彼らとの類似点が多く関係も深いドゥルーズ派との比較を通じ歴史的シリアにおける少数派の文化的特徴を明らかにすることであった。

研究の結果、アラウィー派の源流思想はイラクにおけるイマーム派系の極端派伝統の中から生まれたものであり、少数派相互の関係性の中でそれぞれの独自の思想が形成されたことが判明した。

研究成果の概要(英文)：The objective of this research project was to investigate the process of religious thoughts of the Alawites (al-Nusayriya), an Islamic minority which has been playing an important role in Syria, and to make clear cultural peculiarities of religious minorities in historical Syria by comparison with the Druzes who resemble the Alawites in many points and have been closely connected with them.

As the results of this research, it turns out that the original idea of the Alawites came into being in the traditions of the Imamite-Extremists in Iraq and that unique thoughts of every religious minorities in Syria were formulated through the relationships with other minorities.

研究分野：シーア派思想史

キーワード：シーア派 アラウィー派 ヌサイル派 ドゥルーズ派 イスマーイール派 イブン・タイミーヤ スンナ派

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者である菊地はこれまでシーア派分派であるイスマール派、ドゥルーズ派の思想史を研究してきたが、近年両派との関わりが深いアラウィー派への関心を高めていた。その理由はアラウィー派などの過激シーア派が、イスラム教主流派が自分たちの教義を形成する過程で否定されるべき「他者」として重要な役割を果たしてきたことが分かってきたからである。さらに近年になると、シリア、イラクのイスラム過激派の一部が同派や同じようにイスラム性が疑われるヤズィード教徒を大規模に迫害し始めると、実態がほとんど分かっていない彼らの宗教教義の解明が今日的な意義を帯びることになり、本研究を着想するに至った。

9世紀頃に成立し、シリア人口の約12%を占めアサド家の出身母体でもあるアラウィー派は、20世紀後半以降、少数派でありながらもシリアの政府と軍において大きな影響力を行使してきた。同派の代表的な教義としては、第4代正統カリフであるアリー(661年没)の神格化、三位一体説(キリスト教からの影響が指摘されてきた)、輪廻説などが知られているが、宗教教義書が非公開とされていることに加え、迫害の恐れがある場合には偽りの教義や宗教実践を示しても良いという信仰隠し(タキーヤ)の教義があるために、上記の主要教義についても十分には解明されていない。そのためアラウィー派の真の教義がアウトサイダーに伝わることは稀であり、結果としてアラウィー派の位置づけが以下のように割れてしまっている(Y. Hazran "Heterodox Doctrines in Contemporary Islamic Thought," *Der Islam* 87 (2010), 224-247を参照)。

- (a) イランの国教でありシーア派の最大勢力である十二イマーム派の一部(現代のアラウィー派の高位法学者およびアラウィー派に近い立場にある十二イマーム派法学者が主張)
- (b) 十二イマーム派などの主要なシーア派分派とは一線を画すが、イスラム教シーア派の枠内には収まる集団(近代主義的なスンナ派法学者やアラブ民族主義者の一部が主張)
- (c) イスラム教徒としての資格を持たず、男性の場合処刑の対象となる背教者(前近代の一部の法学者やイスラム教の原点への回帰を目指す現代のサラフ主義者などが主張)

(a)は近現代のアラウィー派が護教のために提唱し始めた主張であり、前近代の同派にそのような思想があったという証拠は見出されていない。(b)は菊地の推測や近年のアラウィー派研究の結論に近いが、個人や集団によって「シーア派」や「イスラム教」の定義がずれてくるためアラウィー派

の位置づけについては意見が分かれる。(c)は2011年以降のシリア内戦の中でイスラム勢力によって積極的に唱えられるようになった主張であり、「イスラム国」などは信徒の処刑事件も引き起こしている。残忍で極端な主張にも思えるが、イブン・タミーヤ(1328年没)のように、シリア地域で活動した権威ある法学者も類似の発言をしている。

現代におけるアラウィー派研究における主要な問題点としては、(1)規範的な宗教書がほとんど公開されていないこと、そのため(2)輪廻説などの主要教義の研究が進んでいないこと、その結果として(3)アラウィー派という宗派集団がイスラム教に対してどのような位置にあるのかが確定していないこと、が挙げられるだろう。(1)(2)(3)は互いに連関しあう問題点である。

## 2. 研究の目的

アラウィー派の規範的な宗教テキストは、一部が欧米の図書館に所蔵されたが、その数が少ないこともあり100年近くその研究は停滞していた。この状況に風穴を開けたのが、Y. Friedman, *The Nusayri-Alawis* (Leiden, 2010)である。Friedmanは、アラウィー派の秘密教義書を暴露した『アラウィー派の遺産シリーズ』(*Silsila al-Turath al-Alawi, no place, 1980*)を基本的に同派の真正の宗教テキストと判定し、同派研究の新しい可能性を示した。本研究はFriedmanの最先端の研究の延長上にあるが、『遺産シリーズ』に収録され、同派に一定の影響を与えたアウトサイダーの文献を同派の真正の文献と同等に扱っている点でFriedman(2010)には問題があると考えられる。それによって、かえって彼らの中枢教義が見えにくくなってしまっているからである。本研究は、『遺産シリーズ』収録文献の真偽鑑定をおこない、同派の真正テキストのみから同派のコアとなる思想を確定することでFriedman研究を相対化しようとする世界最先端の研究である。

その上で本研究が第一に目指すのは、望ましい自派のイメージを外部に宣伝するための著作(先述の(a)の主張)ではなく、自派内のみで流通してきた前近代の規範的な宗教書を通じてアリーの神性、宇宙創成論、輪廻思想といった中軸的教義の内実と変遷を明らかにすることである。

その上で、ドゥルーズ派、イスマール派といったシーア派系宗派の文献を適宜参照し、それらと比較することで、シーア派内に収まる集団なのかそれともイスラム教の枠組みさえも超えた存在なのかを評価することが次なる目標である。ドゥルーズ派はアラウィー派と同じくシリア地域に住み、類似の教義ゆえに同じようにイスラム性を疑われがちな集団であり、イスマール派は両派と比べると主流シーア派に近いが、

アラウィー派と同じルーツから派生しており、両派はイスラム性を考える際には適切な比較対象、指標となるであろう。第二の目標を実現するためには、(c)の主張に見られるような前近代の法学者たちの見解を整理し、彼らの批判の妥当性を検証することも必要になってくるであろう。というのも、イブン・タイミーヤらの背教者/不信仰者宣告では、しばしば虚偽あるいは誤りと思われる教義が彼らに帰せられ、その法判断が現代の過激派が同派を攻撃する際の根拠となっているが、アラウィー派の評価に直結するそれらの主張の妥当性は、同派の教義が正確に提示されない限り検証不可能だからである。

現代シリア政治を牽引してきたアラウィー派は、内戦の主役になることでますます注目を浴びる存在となっているが、その思想の研究はイスマール派やドゥルーズ派と比べて遥かに遅れている。彼らにとっては古典となる前近代の思想を明らかにすることは、シリアの政治や社会を考える上でも重要な意味を持つだろう。また、アラウィー派は8世紀のイラクで華開いた過激シーア派の伝統を直接的に受け継ぐ唯一の集団である可能性が高い。10世紀以降にギリシア哲学など外部からの影響を強く受けたイスマール派やドゥルーズ派と比べても、過激シーア派の伝統がおそらくアラウィー派ではより忠実に継承されている。かつては大きな影響力を誇りながらも、その後淘汰され過小に評価されてきた伝統の延長上にアラウィー派を位置づけることは、イスラーム古典思想の全体像の解明にも寄与するはずである。

3年の研究期間内で本研究が目指すのは以下の通りである。(1) Friedmanの研究の批判的継承。手始めにおこなわなければならないのは、欧米の図書館に所蔵されているアラウィー派写本などと付き合わせることで『遺産シリーズ』に収録されたテキストの真偽鑑定をおこなう。(2) その上で信用度の高いテキストに準拠し、ドゥルーズ派などと比較しつつ初期アラウィー派思想の内実と変遷を分析する。(3) 非アラウィー派によるアラウィー派記述がどの程度正鵠を射たものなのかを検証する。(a) 現代アラウィー派による護教文献、(c) 「イスラーム国」など現代の過激派によるアラウィー派攻撃の文献についてもいずれは研究しなければならないが、シリア内戦の影響で資料の入手が困難であり、今後その種の文献が大量に発行されることが予測されるため、本研究では扱わず、将来における課題としたい。

### 3. 研究の方法

アラウィー派の初期思想については、欧米の図書館に所蔵されている写本や中東で刊行されている関連書籍の蒐集に重点を置き、

イスマール派やドゥルーズ派に関する資料も集める。その上で、Friedmanの研究を参照しながら、既に入手済みである『アラウィー派の遺産シリーズ』に収録されているテキストの信頼度をチェックし、信頼度が高いものについては写本を踏まえて分析をおこなう。

ただし、初期アラウィー派の思想と歴史については、研究が他派の場合と比べて進んでおらず、不明な点があまりに多い。断片的な聖典テキストだけでその全貌が解明されるとは思えないので、類似性の高い他派(特にドゥルーズ派)の教義書や初期の歴史を参照し、それらをアラウィー派の主要教義の形成過程を把握するための補助線とする。

### 4. 研究成果

本研究においてまず注力したのは、『アラウィー派の遺産シリーズ』収録の文献を読解し、アラウィー派の初期教義を記述するための素材となるテキストを吟味することであった。先行研究や『アラウィー派の遺産シリーズ』以外のアラウィー派関連資料と突き合わせて検討した結果、『アラウィー派の遺産シリーズ』収録のハスィービー(957年または969年没)名義の書簡は信頼度が高いが、一方、これまでしばしば初期アラウィー派教義を示すものとして使用されてきたムファッダル(796年頃没)文献については留保が必要であることが分かった。

以上のような前提に基づき、アラウィー派の事実上の創始者と言われるハスィービー名義の書簡のみに基づき、最初期のアラウィー派教義を明らかにしたのが、学会発表である。ここでの分析によれば、ハスィービー名義の書簡に見られる特定個人を神格化する教義は、確かに後代のアラウィー派教義に連続しうるものであるが、イラクのクーファを中心とするシーア派(イマーム派)の極端派伝統を大きくはみ出るものではなかった。三位一体教義、輪廻説、キリスト教的な儀礼などアラウィー派の宗教上の特徴とされる要素は、必ずしもハスィービー文献では確認できない。ハスィービー文献は、イラクのイマーム派系極端派の宗教伝統がシリアの宗教文化と混淆する以前のアラウィー派教義を示すものであったと考えられる。学会発表の研究内容は、研究期間内に学術論文にまとめることはできなかったが、その成果は学会発表や図書などに反映させることはできた。

最初期のアラウィー派が10世紀イラクの極端派の一形態であることは分かったが、唯一布教が成功した場所、シリアで彼らがいかにして変容していったのかを示す歴史文献はほとんどない。イスラーム教系、非イスラーム教系の宗教的少数派が混在するシリア山間部における10世紀以降の状況につ

いてもあまり分かっていない。シリア移動後のアラウィー派の変質を知るためには、まずはこの地域における宗教的少数派の宗教文化を理解する必要があるであろう。特に、同じく輪廻説を信じ特定個人を神格化するものの、激しくアラウィー派と対立した11世紀のドゥルーズ派の思想と他集団に対する姿勢を解明することが、シリアにおける初期アラウィー派のあり方を探るための第一歩となるだろう。そのため、本研究においては初期ドゥルーズ派に関する分析もおこなった。

まず学会発表は、エジプトでの活動に失敗したドゥルーズ派が唯一布教が成功したシリアに拠点を移すことで宗教上いかなる変質が見られたのかを分析したものである。この発表では、エジプトからシリアへの移動は、公然の布教組織の秘密主義的で閉鎖的な宗教共同体への変質をもたらしたことが示された。この結論は、アラウィー派のイラクからシリアへの移動を考える際には示唆的であろう。

学会発表は、よりも少し前の時代を対象にしており、エジプトを拠点とし広範囲に布教活動を展開していた時代のドゥルーズ派が、キリスト教徒やユダヤ教徒に対していかなる布教をおこなっていたのかを明らかにしたものである。当時のドゥルーズ派の説得方法は、ユダヤ教徒に対するキリスト教徒の布教方法に類似しており、旧約聖書と新約聖書において自分たちドゥルーズ派の出現が予言されていたと強く主張する。このような聖書解釈にキリスト教徒からの影響があったのかは不明であるが、解釈の手法自体は、自らの母体であるイスマール派のやり方の枠内にはある。また、ビザンツ帝国皇帝に向けた公開書簡がある一方で、歴史的シリアのユダヤ教徒、キリスト教徒の共同体に対しておこなわれていた宣伝活動を示唆する書簡も存在する。このことは、シリアの宗教的少数派が置かれてきた流動的状況、複数の宗派の間に激しい対立があったこと、対立する一方で対立相手から影響を受けていたことを示している。

学会発表、図書は、現代ドゥルーズ派の他派に対する自己表象を主題にしており、イブン・タイミーヤの流れをくむサラフ主義の台頭に抗して、いかなる根拠に基づいて彼らが自己のイスラム性(スーフイズム性)を主張しているのかを分析した。双方の研究において、ドゥルーズ派と同じく聖典の公開を拒み、自己の十二イマーム派性を主張する現代アラウィー派が比較の対象となった。

雑誌論文は、ドゥルーズ派聖典のはじめの日本語訳であり、翻訳の対象となったのはドゥルーズ派の宇宙論を示す書簡である。本論を通読してもらえれば、その宇宙論がアラウィー派の宇宙論ほど神話的な

ものではなく、新プラトン主義哲学の影響の色濃いものであることが分かるだろう。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

菊地 達也「『英知の書簡集』の宇宙創成論：「真理の開示」翻訳(1)」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』、査読無、Vol. 48、2017、pp. 227-237.

柳橋 博之「洗淨用の水をめぐる法学説とハディースについて」『西南アジア研究』、査読有、Vol. 85、2016、pp. 1-17.

〔学会発表〕(計 11 件)

菊地 達也「宗教にとっての正しさと不寛容：ISの台頭が問いかけること」第16回MULC講演会、2017年11月30日、神田外語大学(千葉県千葉市)。

鎌田 繁「イスラームと神秘主義」龍谷大学国際文化学会主催『多文化時代の宗教論入門』出版記念シンポジウム講演、2017年11月29日、龍谷大学国際学部(滋賀県大津市)。

柳橋 博之“Statistical analysis of isnads as a method for determining the provenance, and the currency in time and space, of legal rules in the 8th century CE,” Hadith and Law in Early Islam, 2017年11月27日、University of Exeter (英国エクセター市)。

鎌田 繁「動物は救済されるのか? : クルアーンの解釈を通して」慶應義塾大学言語文化研究所公募研究プロジェクト「自然世界と人間」研究会、2017年7月22日、慶應義塾大学(東京都港区)。

菊地 達也，“Surviving Strategies of the Druzes,” in Studies on Religious and Socio-Political Minority Groups in Middle Eastern Societies, 2nd Meeting (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究」第2回研究会)、2017年3月4日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(東京都府中市)。

菊地 達也「アラウィー派創始者ハスィービーの思想とその背景」「中東・北アフリカの少数派再考」東京大学中東地域センター・福山市立大学都市経営学部、共催：科学研究費基盤B「中東・北アフリカ地域のイスラーム圏の少数派と弱者に関する総合的研究」、2016年7月8日、福山市立大学(広島県福山市)。

菊地 達也「イスラム教のウンマ体制下における諸宗教・諸宗派：イスラム少数派によるキリスト教徒・ユダヤ教徒への宣教」「基盤A ユダヤ・イスラーム宗教共同体の起源と特性に関する文明的的研究」研究会、2016年5月14日、東京大学駒場キャンパス(東京都

目黒区).

鎌田 繁「クルアーンにおける意味の多層性とイスラームの展開 (Multilayer Structure of the Meaning in the Qur'anic Text and the Development of Islam)」『圖佛敎 100 周年圓光大学校開校 70 周年記念 國際學術大会、2016 年 4 月 29 日、圓光大学校 (韓國益山市) 。

菊地 達也「11 世紀ドゥルーズ派の集團移動: エジプトからシリアへ」東京大学中東地域研究センター (UTCMES) 公開シンポジウム、2016 年 1 月 30 日、東京大学駒場キャンパス (東京都目黒区) 。

菊地 達也「イスラム敎シーア派の起源」宗教間對話研究所第 97 回月例研究会、2015 年 11 月 27 日、東京グランドホテル (東京都港区) 。

菊地 達也「『媒介者』としてのシーア派イマーム」第 61 回宗教史研究会、2015 年 6 月 13 日、東洋英和女学院大学大学院 (東京都港区) 。

〔図書〕(計 6 件)

鎌田 繁ほか、サンガ、鎌田東二編『身心変容のワザ~技法と伝承 身体と心の状態を変容させる技法と伝承の諸相』(身心変容技法シリーズ 第 2 巻)、2018、428 (「スーフィズムにおける身心変容技法」、pp. 294-311 を担当) 。

菊地 達也(編著)、河出書房新社、『イスラム敎の歴史』、2017、128。

菊地 達也ほか、リトン社、杉木恒彦・高井啓介(編)『霊と交流する人びと: 媒介者の宗教史 上巻』、2017、322 (「『媒介者』をめぐるスンナ派(多数派)とシーア派の相克」、pp. 105-128 を担当) 。

菊地 達也ほか、河出書房新社、大城道則(編著)『死者はどこへいくのか: 死をめぐる人類五〇〇〇年の歴史』、2017、262 (「第四章 イスラム敎における死生観と死後の世界」、pp. 104-131 を担当) 。

菊地 達也ほか、明石書店、塩尻和子(編著)『変革期イスラーム社会の宗教と紛争』、2016、410 (第 6 章「現代ドゥルーズ派の自己表象」、pp. 132-157 を担当) 。

鎌田 繁ほか、ノンブル社、宮本久義・堀内俊郎(編)『宗教の壁を乗り越える 多文化共生社会への思想的基盤』、2016、304 (「他者との共生とイスラーム」、pp. 79-91 を担当) 。

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:

出願年月日:  
国内外の別:

取得状況 (計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織  
(1) 研究代表者  
菊地 達也 (KIKUCHI, Tatsuya)  
東京大学・大学院人文社会系研究科 (文学部) ・准教授

研究者番号: 40383385

(2) 研究分担者  
鎌田 繁 (KAMADA, Shigeru)  
東京大学・東洋文化研究所・名誉教授  
研究者番号: 70152840

柳橋 博之 (YANAGIHASHI, Hiroyuki)  
東京大学・大学院人文社会系研究科 (文学部) ・教授  
研究者番号: 70220192

(3) 連携研究者 ( )

研究者番号:

(4) 研究協力者 ( )